

3.3 昭和前期（戦前）

昭和前期は、ソシュール、トルベツコイなどの構造言語学が、小林英夫らによって紹介され、多くの日本語学者に影響を与えた。「共時」と「通時」^{ラング}、「言語」と「言」^{パロール}と「要素」、「構造」と「機能」など、日本語学においても、原理や方法が模索された時代であった。

時代状況としては、「国学ルネサンス」とも呼ばれた「日本的なもの」への回帰という時代風潮があり、また「大東亜共栄圏」構想のもと、日本語教育の振興と、「共栄圏共通語」としての日本語の「純化・醇化」とが、急を要する課題と考えられ、「現代日本語の諸問題」がかまびすしく論議された。

3.3.1 橋本進吉

橋本進吉（1882～1945）は、上代特殊仮名遣いの研究やキリシタン研究などの実証的な歴史研究に大きな業績を残した学者だが、文法研究での特徴も、言語の形式の面に注意を払ったことにある。言語の単位として、文・文節・語の三つが立てられるが、それぞれに形式的な規定が与えられる。

「文」の外形上の特徴としては、「文は音の連続である」「文の前後には必ず音の切れ目がある」「文の終には特殊の音調が加はる」の三つをあげる。

「直接に文を構成する成分」つまり山田文法の「語」や松下文法の「詞」にあたるものを、橋本は「文節」と名づけるが、その規定も「文を実際の言語として出来るだけ多く句切った最も短い一句切り」というものである。

語の品詞分類では、「形態」つまり語形変化と、「職能」つまり他語との接続、という形式面を基準にした分類をしめた。〈図8・9〉

橋本には、前代の山田孝雄や松下大三郎に見られたような体系性・包括性はない。橋本自身が『国語法要説』（1934）の端書きで述べるように、言語の形の方面的研究によって「従来の説を補ひ又訂す」ことをねらったのであって、体

図 8

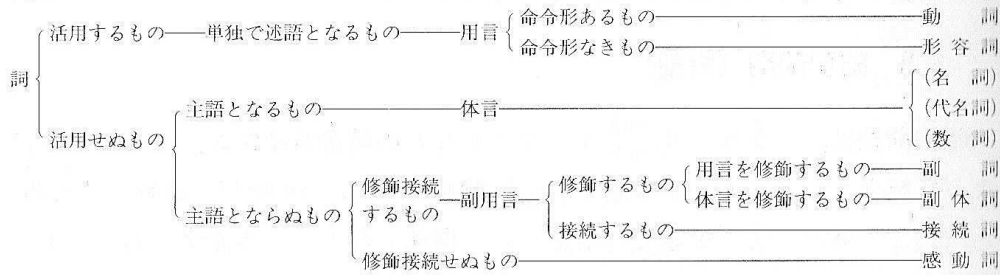
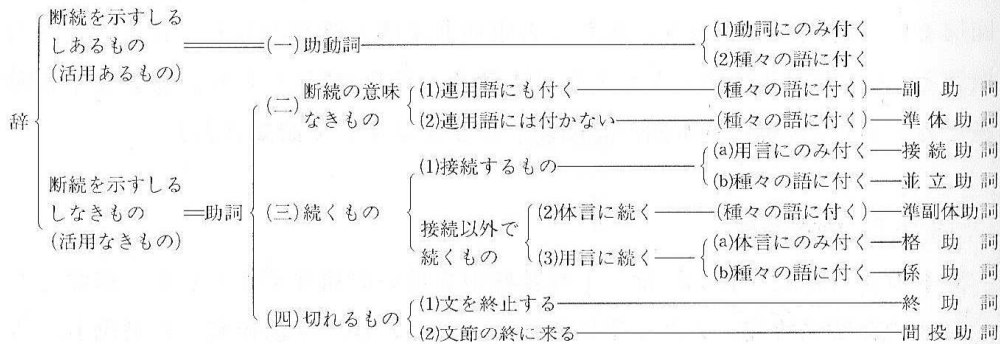


図 9



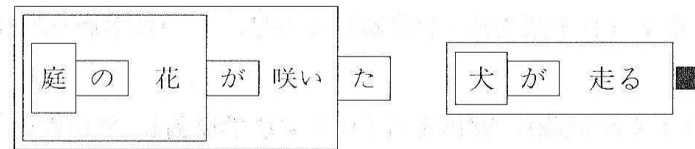
系性よりも「方法の近代化・精密化」をめざしたものというべきなのだろう。物情騒然たる時代にあって、静かに形式主義を守り通したというべきか。

3.3.2 時枝誠記^{もとぎ}

時枝誠記 (1900~1967) は『国語学原論』(1941)『日本文法口語篇』(1950)において、「言語過程説」を唱え、それにもとづく文法を組み立てた。言語過程説とは、「言語」の本質は構成された実体としての言葉にあるのではなく、話し、書き、聞き、読むという言語活動・言語過程それ自体であるとする学説である。したがって、文法も、表現過程の違いにしたがって組織される。まず、言語活動における単位として、語・文・文章の三つが、「質的統一体」として取り出される。「文章論」を立てたことが特徴的である。

品詞としては、「概念過程を経た」「客体的表現」としての〈詞〉と、「概念過程を経ない」「主体的表現」としての〈辞〉とに、二大別され、〈詞〉に「名詞・代名詞・動詞・形容詞・連体詞・副詞」それに「接頭語・接尾語」が属し、〈辞〉に「助動詞・助詞・接続詞・感動詞・陳述副詞」が属すとされる。たとえば「彼も行くだろう」における「行く」という動詞=詞は、主語「彼」の動作を表すが、「だろう」という助動詞=辞は、主語「彼」の推量ではなく、主語がなんであろうと常に話し手の推量を表す。「も」という助詞=辞も、話し手の認定の仕方(この場合、他にも同類があるという認定)を表すという。このように〈辞〉は、話し手のなんらかの態度や気持ちを概念化・客体化せずに直接的に表す(表出する)ものだというのである。「彼も行きたいのだろう」の「たい」は、「だろう」と異なり、話し手の希望ではなく、主語「彼」の希望を表すから、辞(助動詞)ではなく、詞(接尾語)だとする。

文の構造としては、西欧語が主語と述語が釣り合う「天秤型構造」をなすのに対し、日本語では、詞と辞が包み包まれる「入子型構造」をなす、という。助詞や助動詞のないところには、「零記号の辞」(■で表わされる)があるとされる。



こうした詞辞の二分割は、『手爾波大概抄』や『言語四種論』などに見られる日本古来の分類を、理論的に体系化したものだという。文における客体的・事柄的な側面と、主体的・陳述的な側面との関係を、単純明快な形で提示したことにより、戦後、学界に多くの論議を引き起こした。